

研究所だより

第13号

社会福祉法人日本保育協会 保育科学研究所

はじめに（研究所事務局から）

平成25年度の研究テーマは、24年度テーマの「安全・安心」を継続し、副題として「地域と子どもの環境」が追加された。次号の第14号ではこの25年度研究の概要5件を掲載する予定である。本号では、地域と子どもの環境について様々な立場・視点からの執筆をお願いした。

かつて、地域は子どもを守り・育成する役割を担ってきたが、生活の場であるにもかかわらず、住民同士の交流と助け合いや子どもの安全を見守る意識などが減少しているのはなぜか。また、徐々に地域の大人と子どもの距離が広がり、触れ合う機会がなくなりつつあるのは大人社会の変化が要因なのか。昔も今も変わらないのは、あらゆる場面で大人の行動は子どもの手本だということである。このたび執筆いただいた中に、地域の子育て機能と地域での触れ合い、安全・安心を考えるヒントがいくつもあると思う。

もくじ

1. はじめに	1
2. 巻頭言「地域の子どもの環境」..... 巷野 悟郎 ..	2
—特集：地域と子どもの環境—	
3. 地域から失われた子育て援助資源の行方 ～多世代を育てる地域の保育園	青木紀久代 ... 3
4. より良い保育を	池田 順道 ... 4
5. 保育がつなぐ地域と子ども	尾木 まり ... 5
6. すべてのおとなが、「子どもの安全」のロールモデル	掛札 逸美 ... 6
7. 自治会活動で生まれる大人と子ども達とのつながり	片岡 進 ... 8
8. 保育環境の整備をめぐる研究者と実践者の合意形成 —トランス・サイエンスの時代における研究のあり方を求めて—	根上 優 ... 9
9. 子育て環境の役割を担う保育園	藤城富美子 ... 10
10. 子どものあそびよりみた地域の空間の価値 ～十分の一、百分の一、千分の一の不思議～	矢田 努 ... 12
11. 清太郎さんの森、再び —雪の森の保育園—	矢部 三雄 ... 13

巻 頭 言 「地域の子どもの環境」

巷野 悟郎

「子どもとは」と改めて取り上げてみると、おとなに対しての子どもなので、おとなを目指して成長・発達の段階にある存在とも表現されよう。

母胎内でからだを整うと、あるとき子どもは産声で生まれて自発呼吸が始まり、心臓と肺が協力して酸素を含んだ血液を全身に巡回させて、子どもの世紀が始まる。

しかしそこには生物によって条件がある。人は恒温動物であり哺乳動物だから、いつも体温はほぼ一定に保たれていなければならないし、同じ人の乳（或いは牛の乳など代用乳）が必要で、続いて離乳食・幼児食を経て、おとなの食へ移行していく。

このような必要条件で、人は地球上の各所で生活しているから、その場所によっても生活の環境は異なる。

例えば日本は先進国のなかでも南国で、南北に長い島国。周囲は海で囲まれているから、1年の四季ははっきりしている。それだけに土地によっての寒暖・空気の乾湿・風雨に差がある。子ども達の集団生活では、夫々の地域の環境、例えば天候に注目しなければならないであろう。

その情報は、毎日の生活や遊びなどの充実、健康づくりに必要であるし、子ども達は自然の中で生活の知恵を学ぶであろう。

この豊富な自然環境からの刺激は、五感の訴えを豊富にすると同時に、おとなを通しての、情緒の発達に及ぶであろう。

豊かな自然の変化は、日本人の食文化も豊かにする。それだけに子どもの食を、おとなの食に仲間入りさせていくには、離乳食という手のかかる食、更には幼児期の食

を一人ひとり経験させていく。その結果、子どもが成人したとき、日本食を生活の一部として楽しむことができるようになる。

以上は地域の子ども、同じ保育所の子ども全体に共通な環境のことですが、一人ひとりの子どもの立場になったとき、子どもにとって最もじかに及ぶ環境がある。それは子ども自身が作り出す身近な環境の変化である。

0歳・1歳・2歳の乳幼児は、すべてが成長発達の時で、ことに運動神経の発達は反射的な動きからの出発。原始反射と各部の複雑な動きで乳を飲んだり、その時々瞬間的な行動だから、これが時に傷害の原因となり、のどにつめたりで、瞬時の命取りということにもなりかねない。

この頃の子どもにとって、おとなの生活環境はやりたい放題の場。楽しい環境だから、自分が生まれつきもっている発達する力の試運転に最適と言えよう。

このときの子どもの目は輝いているから、おとなは子どもとともに、嬉しさを共有できるけれど、一方ではおとながつくった環境の危険から、見守ってあげなければならない毎日でもある。

それもあまり神経質に、子どもの動作に目を光らせてばかりいると、事故は少なくなるけれど、発達は頓挫してしまう。

0・1・2歳頃、子どものすべてはいつも発達の環境にあるけれど、同じようにそこには危険があるということを、理解しておくことである。

日本語の「育児・保育」を和英辞典でひくと、ずばり「child care・day care」ともあった。
(保育科学研究所長)

特集：地域と子どもの環境

地域から失われた子育て援助 資源の行方

～多世代を育てる地域の保育園

青木 紀久代

変わらない子育て支援のニーズ

子育て支援の施策が次々打ち出された昭和の終わりから、すでに四半世紀以上が過ぎた。まさに、次世代育成事業の支援を受けた人たちが、親となる時を迎えてしまったわけである。20世紀の終わりごろ、子育て環境について、昔あった良きものの多くが失われたと、しばしば嘆きの声が聞こえてきた。その最たるものの一つは、地域子育て機能の低下による、子育て家庭の孤立化であったと思う。

「都会の高層住宅の一室で、母と子が背中合わせに座っている。」そんな姿が、現代日本の救われるべき親子の一場面として、象徴的に語られることが多かった。当時は既に、核家族化や都市化など、私たちの暮らしの前提が大きく変化して久しかった。にもかかわらず、相変わらず世間は、育児に苦痛を感じる母親の体験は、あくまで母親個人に問題があるかのようにみなしがちであり、子育て環境に対する必要な問い直しが不十分であったと思う。

少なくとも現在、育児能力が劣る親だから、子育て支援を受けるのだ、というような馬鹿げた偏見や誤解は薄れ、子どもを育てる者なら、誰もが助けを求めてよいのだ

という社会のゆるやかな合意が、ようやく形成されてきたのだと思いたい。

それにしても、未だに孤独な子育てのイメージが払しょくされていないのは、どうしたことか。それどころか、子どもの数は減り続け、近所で子どもと出会えないのは、都市化の問題だけではなくなっている。

バーチャルコミュニティは子育ての孤独を埋めるか

インターネットの普及は、この間の社会を大きく変えたものの一つである。乳児の孤独はともかく、育児中の親たちのコミュニケーションは、このツールに依存するところが大きい。物理的、時間的空間を必要としないバーチャルな世界は、リアルなコミュニケーションの体験を飲み込むほどの勢いである。

しかし、インタビュー調査をしてみると、子育て中の親がほしい情報は、自分たちが実際出かけることのできる、ごく身近な地域のもが一番であるという。こまめに更新されて、子どもと自分たちの生活に彩を加えてくれるような情報を求めている。つまり、バーチャルコミュニティは、自分たちのリアルな生活の場とつながって初めて、子育ての孤独を救うものとなる（青木，2010）。

それにしても、物理的に子どもの数が少ない社会で、子どもと触れ合う体験自体が、多くの市民にとってバーチャルなものになることの問題が、いよいよ深刻になっているように思う。自分たちの地域で、気軽に

声をかけられる子どもたちがどれだけいるだろうか。そもそも、どう関わったらよいか、見当もつかない、そんな大人も多いことだろう。子育て家庭同士が、出会うだけでは、地域の子育て環境の向上は、あくまで当事者だけの問題にとどまり続ける。

リアルな子育てコミュニティが育てるもの

地域子育て支援の拠点として、保育園の貢献は大きい。今や、子どもを預けて、働きたい母親のニーズに応えるだけの存在ではない。子どもにとってより良い育ちの環境を提供するために、毎日地道な実践が全国で積み重ねられている。

保護者と子どもの触れ合う機会もさることながら、子どもにとって、安全・安心が保障される中で、地域の様々な人と交流する工夫が多くなされている。私も保育の現場を訪れる中で、そういう人たちと出会い、子どもとの交流体験後の分かち合いに参加してきた。皆、生き生きとしている。なぜ、こんなにも保育園を訪れる中学生や高校生、あるいは大学生が、元気になるのだろうか。彼らは、子どもから多くを学んでいるが、精神的な面で、むしろ様々な機能の回復が起こっているように思えてならない。

保育園という場は、地域の中で、多世代が、人としての何かを回復し、そして学ぶ機能を果たしている。リアルに子どもが育つ場には、人が育つ出会いの要素が詰まっているのだ。ここは、地域子育て機能再生のカギを握る、知恵の宝庫である。

(お茶の水女子大学大学院准教授)

より良い保育を

池田 順道

私自身は東京で育っているが、決して都会育ちとは思っていない。家のまわりには海や山はないが、多摩川という大きな川がある。多摩川で魚を釣ったり、ザリガニをつかまえたり、木々も多い地域なので、カブトムシやクワガタなども捕りに行ったことを思い出す。家も古かったせいかわ、くみ取り式の和式トイレが当たり前だったし、薪で焚く五右衛門風呂の記憶もある。夜寝ていれば、どこから入ってきたのか大きなムカデが腕の上を這っているなんてこともしばしばあった。とにかく自然が近くにあったのだ。

時代的なものだが、家の近くの丘の途中には防空壕もあった。鉄格子の扉で閉じられてはいたが、子どもにとっては絶好の“秘密基地”でもあり、暗さからくる恐怖を吹き飛ばすために、友達と一緒にぎゃーぎゃーわめきながら入ったことを思い出す。

また、町の中を流れる小さな川と多摩川を結ぶ排水路にフタがしてあり、長いトンネルのようにになっている場所があった。くるぶしまで水につかりながら、懐中電灯を片手に探検したりもした。その当時でも、親や学校からはそのような遊びは禁止されていたと思うが、それを守らなかったからと言って目くじらを立てて叱られるほどのことはなかったように記憶している。

防空壕の中の乾ききった土のおいや、外とは明らかに違う温度。排水路の中の蜘蛛の巣や薄気味悪い暗さ。どれも、これも、遊びの中にワクワクした気持ちがあったし、においや感触など、実体験でしか得られな

い感覚と記憶が今もよみがえる。

今だったら「危ないからダメ」と、親はもちろん地域の人々からも咎められるような遊びでも、昔は「気をつけなさいよ」の一言を発することで、親の責任は保たれていたし、地域の人も、“悪ガキどもの遊び”を微笑ましく見てくれていたように覚えているが、これは自分にとって都合良く書き換えられた記憶かもしれない。

いずれにせよ、そのような遊びを通して培った人間性の善し悪しは別としても、それらの経験が私という人間を育てたのだと思う。当然、同じ地域に育っていても、そのような遊びをしなかった同年代の子どもがいたことは言うまでもない。その意味からすると「人が育つ」ということは、年代でもなく、住んでいる場所でもない。“経験”が人を育てるのだ。

ご存じのように環境には「人」「物」「自然」の3つがある。保育の世界で考えれば、やはり一番重要なのは「人」である。なぜなら優秀な保育士は、高価でなくても、豊かな「物」を用意できる。大自然が近くになくても、身近な「自然」の不思議に目を向けさせることもできるからだ。良い環境の中で、バーチャルな体験ではない五感に響く多くの経験をすることが、人を豊かに育てるのだと思う。

すなわち保育士は、良い経験を積ませることができるプロでなくてはならないし、保育園は地域の中に存在する、人を育てる“プロ集団”であるというのは少し大げさな表現か。また、保育園は今や文化の伝承を担う場所でもある。その地域特有のお祭りなどがなくとも、「こいのぼり」「七夕」「夏祭り」「餅つき」「正月遊び」「豆まき」「ひな祭り」など、旧来から伝承される日本の文化を継承する担い手なのである。

日本文化を継承し、人を豊かに育てる保育園。「保育」って素晴らしい。「保育園」ってすごい。自画自賛だと嘲笑されようと、このような“場所”は無くてはならないし、保育に関わることのできる自分を幸せだとも思う。自分たちが行ってる保育を振り返り、反省し、進化していく。今行っている保育が完璧だなんて思っていない。むしろ足りていないと思うことの方が多い。「より良い保育を」という無限の課題を我が人生を賭して突き進むだけである。

(東京都・舟渡保育園園長)

保育がつなく地域と子ども

尾木 まり

家庭的保育者からよく聞く話にこういう話がある。

週末に保護者が子どもと一緒に地元の商店街に買い物に行くと、行く先々で保護者が面識のない人から、子どもの名前を呼ばれ、声をかけられるので、保護者はとても驚いたというものである。

この話が出ると、「そうそう」とうなずく保育者も多いことから、特定の人にだけ起こっていることではないようだ。

また、最近聞いた話では、新しく開発された住宅地に転居した時に、周りの人たちとのつながりが作りにくかったが、家庭的保育を始め、子どもたちを連れて外に出かけるようになったら、いろいろな所で声をかけられるようになり、子どもはもちろん、保育者自身の地域とのつながりも濃厚になったそうだ。

いずれも保護者が働いている時間帯にも、

子どもたちの生活は地域にあるからこそ、さまざまな人々と出会い、交流をしていることを物語るエピソードである。家庭的保育は保育者の居宅や賃貸アパートなどで行われるため、園庭がなく、日々散歩に出かけ、地域の公園などを活用している。そういった活動の中で、毎朝散歩道で挨拶を交わす近隣の住民がいたり、公園でおもちゃの貸し借りをしながら、一緒に遊ぶ子育て家庭、ゲートボールに興じる高齢者との交流がある。そうした出会いをきっかけに、活動場所が広がることもある。これらは保育者の適切な媒介があって作られるのだが、子どもという存在もまた、保育者と地域の人々との関係づくりを円滑にしていることに気付かされる。

保護者の就労形態の多様化や職住分離の影響を受け、子どもたちが保育所や放課後児童クラブで過ごす時間が長くなる傾向にある。保護者が子どもを一人でおいておくことに不安を感じる事件や事故も頻発しており、その結果、送迎や集団登下校等が行われ、もとより習い事で忙しい子どもたちが自由に地域を探索する機会はどんどん少なくなっている。

子どもの安全を考えれば、なるべく子どもを安心できる場所にいさせたいと思うことは当然のことだろう。しかし、安全が確保された場所に子どもたちを長時間に渡り、囲い込むことになっていないか問い直す必要がある。

そのためには、園庭のない保育施設に限らず、保育所等の施設や放課後児童クラブの拠点がハード、ソフト両面で充実している場合にも、子どもたちがそこで過ごす時間の中に、地域資源を積極的に活用し、地域の人々と地域を舞台に過ごす活動を取り入れると同時に、地域の人々を施設や拠点

に迎え入れる機会を日常的に作っていくことが必要だと考えている。

そうすることにより、子どもたちが地域に親しみ、思いのままに過ごせる自分のお気に入りの居場所を見つけ、助けを求めたり、頼りにできる保護者以外の知り合いをつくることができるようになるだろう。

東日本大震災時には、保育所から避難する子どもたちを地域の人々も援助したことにより、被害を最小限に留めることができたと聞く。そのために保育所は日頃から地域に向けて、何かあった時の援助を依頼しているそうだ。予測できない天災、人災など、さまざまな危険から子どもたちを守るためには、子どもと直接的に関わる人だけが対応する方法だけではなく、地域社会に子どもを見守る目を育て、保育所にいるあの子どもたちは大丈夫だろうかと気にかかる心を根付かせていく取り組みが必要である。

子ども自身が地域を知りなじむ、地域にも地域で暮らす子どもに向ける目を育てる、その両面からのアプローチが、子どもが暮らしやすい街づくり、子育てしやすい環境づくりにつながるのではないだろうか。

(子どもの領域研究所所長)

すべてのおとなが、「子どもの安全」のロールモデル

掛札 逸美

生まれ育った地域の安全文化、家族の安全文化は、子どものその後の安全意識・行動に相関するか？ 地域のおとな、家族の安全行動は、子どもに伝播するか？ デー

タは、「相関する」方向を支持している。

博士論文のために収集したデータ（コロラド州立大学フォート・コリンズ校学生の自転車ヘルメット着用行動）の一部を用いて、私は、この関係を検討した論文を2009年に発表している^(*)。フォート・コリンズ市は、車中心の米国の中でも珍しく自転車を推奨し、「自転車にやさしい町」のひとつとして知られている。コミュニティ全体の自転車ヘルメット着用率は成人、子どもともに約5割（路上での観察による）と高いが、やはり学生となると約2割（私が収集したデータ。自己申告による）と低くなる。

しかし、学生が「どこで育ったか」によって、異なる結果が得られた。フォート・コリンズ市周辺で育った学生（成人のヘルメット着用を見て育った）は、他の場所で育った学生に比べ、統計学的に有意にヘルメットをかぶり、自転車の安全に対する意識も高かったのである。また、これまで米国で行われてきた自転車ヘルメット研究では、中学・高校になるとヘルメットをかぶらなくなるのが通例であったが、私のデータからは、家族がヘルメットをかぶっている子ども、フォート・コリンズ市で育った子どもたちは、中学・高校になってもヘルメットをかぶり続けることがわかった。

もちろん、この研究はあくまでも自己申告のデータに基づくものであり、各種の認知の歪みから自由ではない。また、結果はあくまでも相関関係を示したものであって、「子どもの頃の行動が、その後の行動を規定する」という因果関係を示すものでもない。しかしながら、このような結果が得られたことは、地域や家族の安全文化の「伝達」を日本でも科学的に研究することの重要性を示唆している。

心理学者アルバート・バンデューラ

(A. Bandura)らが60年代以降、実験から示し続けてきたように、人間は子どもであれおとなであれ、「他人の行動」から学ぶ生き物である。「言われたこと」ではなく、「見たこと」や「共に行ったこと」が子どもの行動を作っていく。米国のように個人主義と言われる国であっても、主観的規範(perceived norm、「私のまわりにいる大事な人たちは私が〜すべきだと思っている」)は、安全に関する意識や行動に影響する。主観的規範は、本人が周囲を観察するなかで培われるものであり、周囲が「どのように行動しているか」が非常に重要になる。

では、日本はどうか？ 言うまでもなく、日本は主観的規範が行動に強く影響する文化である。今のおとなは、その親や周囲のおとなを「見て」育ち、今の子どもは今の親や周囲のおとなを「見て」育っている。おとな世代の行動が次の世代の行動に強く影響する。「おとなが口で言っていること」ではなく、「実際に行動していること」が、である。

日本では、ほとんどのおとなが自転車ヘルメットをかぶらない。信号のない所を子どもと一緒に渡る保護者もいる。「前を向いて歩きなさい」と子どもに言いながら、自分はスマートフォンや携帯の画面に入っている。電車のドアが開けば、乗る側が我先に車内に入ろうとし、降りる人をつきとばしても謝罪さえしないことがある。これは保護者だけの課題ではない。子どもは周囲にいるおとなすべての行動を見ている。「私は子どもがいないから関係ない」「自分の子どもはもう育ったから」とは言えないのである。

安全（命を守ること）が文化の一部であること、そしてその文化は「安全行動」という指標で定量的に計測できることは、私

の論文以外でも世界じゅうのさまざまな研究者が論じている。「安全第一」「命を守る」と口にするのは簡単であり、今の日本でもそこそこで耳にし、目にする。けれども、安全の文化がそこから醸成されることはない。家庭、保育園、学校、地域、国、そこにいる一人ひとりがいかに「命を守る具体的な行動」をするか。そこから初めて、子どものみならず、すべての人の命を守る文化が作られていくことになる。
(掛札逸美、NPO 法人保育の安全研究・教育センター代表、心理学博士)

*Kakefuda, I., Henry, K.L. & Stallones, L. (2009). Association between Childhood Bicycle Helmet Use, Current Use, and Family and Community Factors among College Students. Family and Community Health, 32, 159-166.

自治会活動で生まれる 大人と子ども達とのつながり

片岡 進

駅から自宅までの夜道を歩いていた時のことです。中学校正門前の常夜灯の下で、14、5歳の男の子が7、8人集まっていました。手には皆、タバコがありました。私は立ち止まり、彼らの顔をちょっと見てから「中学校の正門前でこんなことをしているとは驚いた。ふつうはもう少し目立たないところでやるもんだ。町の人達が心配するよ」と静かに声をかけました。

大人の言葉に彼らは一様にハッとした表情を浮かべましたが、中の1人が「何を〜このクソじじい」という感じで前に出て

きました。すると中央にいたリーダー格とおぼしき1人がその子を押すとどめ、小さく「わかりました」と言って自分のタバコを踏み消し、「引き上げるぞ」という素振りで歩き始めました。ほかの子たちも慌ててタバコを投げ捨て、後をついて行きました。その顔に記憶はありませんが、おそらくリーダーの少年は私のことを知っていたのだと思います。

私は3年前まで14年間にわたって自治会の会長をしていました。その前の副会長時代、中学校PTA役員時代を含めると20年以上、地域の活動に関わり、子ども達ともふれ合ってきました。おかげでコンビニのレジでバイトの娘さんから笑顔一杯の挨拶を受けたり、着慣れぬ背広姿のビジネスマンから駅の改札で律儀な挨拶を受けたりすることもしばしばです。大人になっていく子どもの姿、表情は変化が激しく記憶をたどるのは難しいのですが、私の顔はあまり変わらないので覚えていてくれるのです。

こんなこともありました。ヘルメットをかぶらずにバイクで走っていく少年の後ろ姿に「バカヤロー！ヘルメットをかぶれ、死んだらどうする」と叫んだのです。この子の顔には見覚えがあったのです。それから何日か後の町内清掃活動の折、1人のお母さんが近づいてきて「うちの子が最近、ちゃんとヘルメットをしてバイクに乗るようになったので褒めてやったら、『会長さんに叱られたから』と言ったんです。ありがとうございました」と頭を下げられました。

私が自治会活動の中で行ったこと、それはまさに“青空幼稚園”でした。40年におよぶ幼稚園での取材活動で見聞きしたことを応用してみたのです。たとえば夏祭りでは、リヤカーを使つての荷物の運搬、テン

トの組み立て、提灯のつり下げ、ジュース類の販売などを子ども達に手伝ってもらいました。もちろん危険がないよう、足手まといにならぬよう監視役の大人を何人も立ててのことですが子ども達の表情は真剣です。準備が整って大人がビールで乾杯する隣で子ども達もジュースで乾杯しました。子どもは大人の真似をすること、手伝いをするのが大好きなので、その顔には喜びが満ちていました。

ステージでは、大人のかっぱれやカラオケに混じって幼稚園児のフラダンス、チアダンスが披露され、ビデオカメラが並んで発表会の雰囲気にもなりました。近くの幼稚園の園長さんも招待に応じて顔を出してくれ、在園児も卒園児も大喜びしたものです。

クリスマス会では、子ども達がゴミ拾いをしている間に大人がカレーやスパゲティを作ってバイキングランチの準備をします。ゴミ拾いが終わると、こりに凝ったサンタさんが鈴を鳴らしながら現れ、なぜか日本昔話やお釈迦様の話を語ります。サンタ役はいつも私で、自治会長を退いた今も続けています。小学校3、4年生になるとサンタさんの正体を見抜いていますが、小さい子たちの夢を壊してはいけないと思ってか決して口に出しません。そのやさしさに助けられています。

ある時こんなことがありました。数日間仕事に没頭して、久しぶりに買い物に出た時です。近づいてきた女の子が私の顔をのぞき込んで「おじさん、大丈夫？」と言ってくれたのです。疲れ切った無精ヒゲの顔を見て、心から心配してくれていることがわかりました。

それまでも、常に子ども達の日を感じて、歩き方、自転車の乗り方、信号の待ち方な

どを注意してきましたが、それからは家にいるときも毎日ヒゲを剃り、きちんとした身なりをして子どもに心配をかけないようにしています。そんな話を自治会役員さんにすると「私も気をつけています」という声が次々に出てきました。「地域が子どもを育て、子どもが地域がつくる」を実感する日々です。

(幼稚園情報センター代表・『月刊・私立幼稚園』編集長)

保育環境の整備をめぐる研究者と実践者の合意形成 —トランス・サイエンスの時代における研究のあり方を求めて—

根上 優

大学の教員として晩年を迎えた最後の5年あまり、保育園の経営に携わりながら保育のあるべき姿を求めて研究会を主宰する方々と出会ったことが機縁で、いつの間にか仲間に加わるようになった。私にとって保育園はまったくの未知の世界であり、当初、そこで飛び交う言葉の意味すら理解できなかったことはいままでのない。しかし、研究会も数を重ねるうちに、保育界では「保育の質」が重要な研究課題となっていることに気づき、リスクの社会学的研究に従事していた私から、保育の質を保育環境の整備の問題として捉え、それをリスクの観点から研究してはどうか、と提案し、その後、月1回のペースで研究会を続けていくことになった。『保育科学研究』の創刊号に寄稿した「保育環境の整備とリスク・ガバナンスに関する研究」は、そうした研究

の積み重ねが産み出した小著である。

とはいえ、大学の研究者と保育の実践者・当事者の間で対話を進めるといっても、それほど簡単なことではなかった。一口にリスクの観点から保育環境の整備について考えると、その意味する範囲は広く、保育園という〈場〉の物理的・社会的・保健衛生的環境の整備はもちろんのこと、実際に保育の仕事に従事する経営者と保育士、さらには園児の保護者や近隣住民、病院、行政・監督官庁らとの関係性にまで及んでいた。そこで研究を進めるにあたって最初に、それらの保育の単位が連携してリスクに対処する空間的・機能的なシステム・モデルをイメージすることが必要であった。その上で、そうした関係性において発生するリスク事象をマクロな視点から先見的に統治する「リスク・ガバナンス」の時間的・継起的モデルの構築へと発展させねばならなかった。

ところで、「リスク・ガバナンス」という言葉は文化的な意味を強く内包している。ピーター・バーンスタインが『リスクー神々の反逆』の中で示したように、リスクはイタリア語で「勇気をもって試みることを意味し、未来や未知を意識したときに立ち現れる時間的・空間的観念であった。その意味では、いま、ここの一瞬においてしか成り立たない、言い換えれば、過去から現在までの時間軸においてしか成り立たない「安全」を文化的に至上の価値としている日本社会においては、リスクを前提に議論を展開することは根本的に難しい問題を孕んでいた。ここに私たちの議論が容易に進まなかった原因があった。リスク、危険、安全、ハザード、安全管理、リスク管理、危機管理、リスク・マネージメント、等々をめぐって、保育の現場で使われてい

る日常用語・経験概念と、一般性・汎用性の高い科学の分析概念に関する合意形成の難しさに直面する。もともと立ち位置のまったく異なる私たちにとって、議論の対象を示差する用語の意味が異なることは決定的な問題である。その境界を乗り越えることなくして相互のコミュニケーションは一步も前進しない。細やかな研究を通じてではあるが、科学哲学・科学技術論の研究者である小林傳司が『誰が科学技術について考えるのかーコンセンサス会議という実験』と『トランス・サイエンスの時代ー科学技術と社会をつなぐ』の中で述べているように、科学や科学技術の概念それだけを取り上げてみても、何もかも専門家に任せるのではなく、素人集団を含めた社会全体での合意形成に基づいて構築されねばならない時代、すなわち彼のいう「トランス・サイエンスの時代」に今、私たちは生きていることを知らされるのである。

保育の科学の専門家と保育の実践者が協働して研究を進めていくことは今後ますます活発になると予想されるが、そこには科学の記号的な〈情報〉と実践の身体的な〈気づき〉との間にある独特の「緊張感」が独創的な研究を産み出すために欠かせない。『保育科学研究』がそうした緊張感のあるコミュニケーションの〈場〉であることを願っている。（宮崎大学名誉教授）

子育て環境の役割を担う保育園

藤城 富美子

保育需要は年々増加傾向にあり、平成24年には212万人（厚生労働省24年10月発

表) の子どもたちが保育されています。特に3歳未満児の保育需要が求められ、全国の3歳未満児の3人に1人の割合で保育されている現状からみても、保育園は子育て支援に大きな役割を担っています。

保育園の特徴的なことは、通園してきている子どものほとんどが、身近な地域で暮らしているということです。また、兄弟関係だけではなく、両親や祖父母まで同じ保育園に通っていたということも珍しいことではありません。保育園は、今までもまた、これからも地域の子育て支援の場としての役割を担っていくことでしょう。

【子育て支援を担う保育園の役割】

保育園の役割には、入園する子どもの保護者への支援は勿論のこと、地域の子育て家庭に対する支援が求められています。各保育園では地域に開かれた保育園をめざし、身体測定、育児相談、保育講座、園庭解放、体験保育、園での行事のお誘いなど地域との関わりに様々な工夫をしています。

子育ての悩みは、成長や発達・病気、母乳、離乳食、夜泣き、トイレトレーニングなど多岐にわたります。保育園には保育士は勿論のこと、看護師や栄養士など専門職員が揃っています。悩みを専門職員に相談することや保育の体験をすることで“当たり前の姿”“これでいいんだ”と安心感や余裕を持つことができます。保育園は地域で暮らす子育て家庭にとって、人的、物的環境においても子育て支援の宝庫でもあります。保育園の社会的資源をフルに活用することで地域の育児力の向上に貢献することができます。

【子どもの豊かな感性を育てるために】

子どもたちは、家庭や保育園・地域の

人々に守られながら育っていきます。特に、地域の自然の環境は子どもの豊かな感性を育ててくれます。子どもたちは散歩にでるのが大好きです。毎回通る散歩コースでの光景に期待が高まります。いつも昼寝をしているネコに挨拶、川沿いの鯉や時折姿を見せるカメに喜び、草むらの花や虫を通して自然の動きに感動します。思いっきり遊べる広場や大型のジャングルジム、滑り台などで開放感を満喫します。また、近所でお借りしている畑では、ジャガイモ、サツマイモにナス、トマト、枝豆、オクラと沢山の収穫を経験し喜びます。毎年焼き芋会には、子育て相談に来ている親子が姿をみせてくれます。近所におすそ分けすることで日頃の感謝を伝えます。このように地域の人々との関わりが子どもの人間性も育ててくれています。

四季折々の姿を見せてくれる自然や地域の人との触れ合いを身近で体験できる場があることは、子どもの豊かな感性を育てるのには大事であると感じます。子どもたちがのびのびと、また安心して遊べる環境が地域の中に沢山できて欲しいと願っています。

【感染症から子どもを守るには】

子どもたちの健やかな成長には、心身ともに健康であることが望まれます。しかし、乳幼児期は様々な感染症に悩まされ成長・発達を阻害されることもあります。

特に保育園は、抵抗力の未熟な乳幼児が集団で長時間寝起きを共にしながら密接な関わりをしているだけに、ひとたび感染症が持ち込まれた場合には瞬く間に広がっていきます。また、同じことが地域にも言えます。園児から家庭へ、家族から地域や社会へと伝播していくことも稀ではありません

ん。子どもを守るために、保育園・幼稚園、学校と地域で感染症情報を共有することで流行を早く察知して、適切な対策をとることができます。そのことが子どもの健康を守る大きなカギになると思っています。

(全国保育園保健師看護師連絡会看護師)

子どものあそびよりみた地域の空間の価値 ～十分の一、百分の一、千分の一の不思議～

矢田 努

私たちの身の回りにあるモノの価値にひそむ不思議についての話である。子どもが成長し、まちの中であそぶようになる10歳前後(小学5年生ぐらい)を調査してみると、子どもは限られた小さな空間に閉じ込められている。

学区の地図を使って、実際にあそんでいる場所を質問し、面積を計測すると、あそび空間全体のなかで比率が大きい空間は小学校校庭(35%前後)と公園(33%前後)ぐらいしかなく、これらがあそび空間全体の大半(7割程度)である。一人あたりのあそび空間の面積は3,400㎡前後であり、最も少ない地区では約1,400㎡と、バスケットボールコート2面程度にすぎない。また、道路は、あまりあそべない空間となっているため、あそび空間が孤立化してしまふ。あそびながら移動することができないからである。

子どもの世界をもっと広げられるようにするには、あそび空間の性格について理解を深める必要がある。そこで、その空間で実際にあそぶ面積(分子)をその空間の実

面積(分母)と比較してみると、学校校庭、公園、道路といった空間の種別により、一定の割合で使われていることが確認できた。これがあそび空間発生性にみる「べき乗の法則性」である。

よく使われる空間としては、まず小学校校庭がある。これが利用率の最も高い空間であり、面積の10%前後が使われている。これを1とする指数(面積利用率指数)でみると、街区公園や近隣公園は1、小公園や地区公園は1/10、道路や駐車場は1/100、田畑・果樹園、社寺境内、墓地などは1/1,000前後となる。

公園を大きさ別にみると、小公園はプレイロット、幼児公園、児童遊園などと呼ばれる小さなあそび場で面積250㎡前後、街区公園はかつて児童公園と呼ばれていた身近な公園で面積2,500㎡ぐらい、近隣公園は少し大きな公園で2ha(100m四方が二つ分の広さ)ぐらい、地区公園はさらに大きな公園で4haぐらいである。

べき乗の法則性は単純な加算の原理が成立しないことを意味する。1に0.1や0.01を足しても1から大きく増やせず、子どものあそび空間を広げるという目標を達成するには戦略的な空間整備が必要となる。

あそび空間発生性が高い空間は面積的な利用率により評価される価値の高い空間である。小学校校庭は面積利用率指数でみる利用価値が街区公園を除く公園の数倍、集合住宅一棟の外部空間の8倍前後と非常に高く、有効利用を進めたい。公園種別では街区公園と近隣公園の価値が高く評価される。小公園は、面積利用率がかなり下がるだけでなく、面積も小さいため、十分なあそび空間の発生が期待できない。

さらに、公園配置が偏っていると公園整備の効果が上げられないことなども調査で

確認できた。たとえば、自宅から 250 m 以内に公園がある地区の面積が 60% であれば、学区全体としてみれば、公園面積を 60% に減じたぐらいしかあそび空間の面積が確保できない。

公園の整備内容や周辺環境もまた重要である。たとえば、整備内容等よりみて、もっぱら大人の憩いの場となっている公園であれば、子どものあそび空間としての価値は一般的な公園の 7~8 割相当にすぎない。

以上、子どものあそび空間を広げるための政策としては公園の整備効果が高く、とりわけ街区公園や近隣公園の価値が高く評価されることより、周辺の歩ける道も含め優先的な整備が必要とされることを指摘した。都市環境整備の基礎的指標とされる公園整備は、こどものあそび空間の量的確保にあたって基本的な重要性を持つといえる。

(愛知産業大学大学院教授・建築学専攻)

参考文献：矢田努「遊び環境の評価と子どもの発達」『保健の科学』第 49 巻、第 6 号、2007.6、pp.398-402

清太郎さんの森、再び — 雪の森の保育園 —

矢部 三雄

今年は記録的な寒さの厳しい冬だった。秋田でも決して例外ではなく雪もことのほか多かった。そんな寒空の下、元気な子どもたちの声が響き渡っている森があった。秋田市南部の丘陵地帯にある佐藤清太郎さんの森だ。清太郎さんの森は秋田市などにある保育園生を受け入れ「森の保育園」を

開いている。今年の冬は、1 月と 2 月で合計 15 回、660 人もの子どもたちがやってきた。雪の無い季節の「森の保育園」への来園は以前から呼びかけていたが、「雪の森の保育園」は数年前からになる。

保育園のバスが清太郎さんの家の前にある作業小屋に着く。子どもたちに森に入る前の注意事を約束してもらい森に向かう。今にも吹雪になりそうな空模様に先生方は乗り気でないが、元気な子どもたちの後からついていく。途中、子どもたちは田んぼの中を走り出す。先生たちは雪に足を取られて追いつかない。子どもたちのバランスの良さはさすがだ。森に着くと、氷点下の雪中で子どもたちは転げ回ったり、急な斜面で尻滑りをしたり自由奔放に遊びまわる。1 時間もすると、手袋は雪まみれで手が凍え、防寒靴の中も雪だらけでベチャベチャになる。遊び疲れ小屋に戻る。そこで着替えをして、暖かいスープを飲んでお昼ご飯を食べるとまた元気な子どもたちになる。そして、保育園に帰っていく。

清太郎さんも、最初のうちは雪の森の反応が心配だった。保育園に帰ってからの子どもたちの体調などを後日先生方や保護者の方に聞いてみたらしい。その答えは、園児にはとても人気のある園外保育だったこと、楽しそうで風邪などをひく子はなくみんな元気だったこととの反応だった。そして、先生方からも「子どもの頃に再び楽しく遊んだ、うれしかった。」という感想を聞くことができた。子どもたちからもたくさんの手紙が来たが、「寒かった」、「森は嫌い」というものは一つも無かったそうだ。

清太郎さんは、「秋田の自然の宝物は雪の森であると確信をもつことができた。」という。自然の厳しさと怖さを、そして人間の作ることのできない一面真っ白な雪、

雪と風とが合体した吹雪、野も山も森も人間の生活圏全てを平等に冷凍させる力など、自然の力を見る、知ることができる。それに加え、厳寒のなかで生き続ける木々や雪面に付いた動物の足跡など雪の中で生きるものを感じる。そんな、大人の作ってくれたものではない本物の自然の力を強く感じる一歩になっているはずだと言う。そして、大雪の中で、どうしたらいいかを自分で工夫して遊ぶ楽しさを求めている姿から、「自然は少し怖いけれど友達になろう」としているようにも感じるとも言う。

子どもたちの想像力はすごい。そうした想像力を育てる上で、自然力はとても有効だと思う。こうした考えから、全国各地で

森の保育園が生まれている。清太郎さんは、さらに秋田の地域性に着目して、あえて大人たちが野外に出るのを躊躇する厳寒期に「雪の森の保育園」をはじめた。この森で遊んだ子どもたちが、どんな大人に育っていくのが楽しみでもある。

こうした野外保育を受け入れてくれる森は我が国ではまだまだ少数だし、野外活動に通じた知識をもつ保育士さんもそれほど多くはない。フィールドの確保と指導者の養成は森林側も本気で取り組まなくてはならない課題と感じる。

また来年の冬も清太郎さんの森で元気な子どもたちの声を聞くのが楽しみだ。

(元林野庁東北森林管理局長 矢部三雄)

第1期日本保育協会保育科学研究所倫理委員会委員名簿

※敬称略。50音順

伊 澤 昭 治……………五反田保育園園長

内 田 伸 子……………お茶の水女子大学名誉教授

潮 谷 義 子……………日本社会事業大学理事長

※田 中 哲 郎……………元・国立保健医療科学院部長

普光院 重 紀……………保育園を考える親の会代表

※委員長

日本保育協会保育科学研究所倫理委員会細則

第1条 日本保育協会保育科学研究所（以下研究所と略す）において行われる保育に関する調査、研究等が、個人情報保護、倫理面から人権の尊重および科学的妥当性をもって行われることを目的とし、研究所に倫理委員会を設置する。

第2条 倫理委員会は次の事項について審査する。

- (1) 保育に関する調査、研究等を行う者から研究所長を通じて倫理委員会に申請のあった事項。
- (2) 研究所長が審査を要すると判断し、倫理委員会に付議した事項。

第3条 倫理委員会委員は、有識者2人、研究所運営委員2人、保護者の立場を代表する者1人の5人とし、日本保育協会理事長が委嘱する。

- 2 倫理委員会委員長は、委員の互選とする。
- 3 倫理委員会委員長が必要と認めた場合には、委員会に委員以外の者の出席を求め、意見を聴取することができる。
- 4 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

第4条 申請者は「倫理委員会審査申請書」（様式1）を、研究所長を通じて倫理委員会委員長に提出する。

第5条 倫理委員会は、委員の過半数をもって開催することができる

- 2 議決は出席委員の3人以上の合意をもって決する。
 - (1) 審査判定は、承認、条件付き承認、内容変更の勧告、不承認の区分とする。
 - (2) 倫理委員会委員長は審査終了後、結果を研究所長に報告する（様式2）。
 - (3) 研究所長は、申請者に結果を通知する（様式3）。

第6条 申請者は審査結果を踏まえ、再審査を申請することができる（様式4）。

第7条 審査経過および結果は、申請書と共に5年間研究所事務局に保存する。

第8条 この細則の変更については研究所運営委員会で決める。

（附 則）

倫理委員会は、3人以上が同意すればメールによる会議も可能とする。
この細則は、平成25年4月1日から施行する。

日本保育協会保育科学研究所 第3回学術集会開催案内

テーマ 子どもの安全・安心と保育所保育
対象 保育所の職員、大学等の教員・研究者、保育行政担当者等
募集人員 100人（先着順）
期日 平成25年9月21日（土）・22日（日）
主催 日本保育協会保育科学研究所（日本学術会議協力学術研究団体）
場所 こどもの城研修室（東京都渋谷区神宮前5-53-1）
参加費 日本保育協会 会員5,000円・非会員6,000円
※当日現金にてお支払い
申込締切 定員になり次第

〈第1日目：平成25年9月21日（土）〉

講演 「保育所保育の理念と哲学」
石井 哲夫（日本保育協会理事長）
報告 「保育所の事故事例・統計」
（日本興亜損害保険株式会社）
講演 「わが国の子どもの安全・安心をどう確保するか？」
五十嵐 隆（国立成育医療研究センター総長／日本小児科学会会長）

〈第2日目：平成25年9月22日（日）〉

研究発表及び質疑（平成24年度研究）

- ① 「乳児保育におけるトラブルの要因と解決に関する研究」
- ② 「人材確保・育成に関する保育士養成校と保育所の連携に関する研究」
- ③ 「障害のある子どもの生きやすさを支える支援に関する研究」
- ④ 「保育所における災害時の栄養・給食対応に関する研究」
- ⑤ 「保育所のリスクについて考えるー保育の実践者の「自己認識」を高めるためにー」
- ⑥ 「リスクマネジメントについての保育所長の意識と取り組みに関する研究」

シンポジウム 「子どもが元気で活き活き遊べる環境への配慮

＝冒険・探検・好奇心を育てる＝

内田 伸子（コーディネーター、お茶の水女子大学名誉教授）

堀 昌浩（さくら第2保育園園長）

荻須 隆雄（前玉川大学教授）

並木由美江（全国保育園保健師看護師連絡会会長）

特別講演 「保育における子どもの『学び』」

佐伯 胖（東京大学・青山学院大学名誉教授）

◎ 参加ご希望の方は日本保育協会企画情報部（03-3486-4419）までお電話下さい。申込み用紙をお送り致します。

日本保育協会保育科学研究所『研究所だより』第13号

2013年7月31日

発行者：巷野 悟郎

発行所：社会福祉法人日本保育協会 保育科学研究所

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-1

こどもの城13階

TEL：03-3486-4412 / FAX：03-3486-4415

URL：http://www.nippo.or.jp

(1,100)